グラウンドを陸上部員たちが疾走している。
その先頭を走るのは長身で爽やかな顔立ちの陸上部員だ。
ＤＫらしい若々しさだが、手足の大きさから将来はもっと身長が伸びることは推測できた。
ランニングシャツにスパッツという健康的な出で立ちではあったが、身体のごく一部は卑猥であった。
真っ赤なスパッツに覆われた股間ではむっちりとしたもっこりが太ももの動きに合わせて左右に揺れていた。
金玉の大きさや亀頭のずる剥け具合が透けて見えるそのもっこりだけ見れば、発展途上の男の子ではなく、立派な雄だと判断できるだろう。
ＤＫに不相応な立派なもっこりを備えた陸上部員、それが井上疾風なのだ。
「よし、全員集合」
監督である工藤監督の号令に、疾風たちは集合した。
ランニングシャツにスパッツという陸上部らしい健康的な男子の群れの中で、疾風は一際目立っていた。
陸上部員たちの中でも長身を誇り、爽やかなイケメンフェイス、そして、スパッツのもっこりの別格ぶり。
他の陸上部員たちはもっこりも小さく、亀頭の形が目立つほどのもっこりをしているものはいない。
そんな中で疾風のもっこりは金玉の圧で押し出され、陰茎の太さも亀頭のずる剥け振りも透けて見える。
陸上部員としての能力はともかく、雄としての格付けは疾風の圧勝であった。
「さて、練習の途中に集まってもらったのには訳がある」
工藤監督が渋い顔をしていた。
工藤監督が渋い顔をすることは滅多にない。
そのことに疾風は何が起きたのかと思った。
「実は、この陸上部に苦情が届いた。
健康的なＤＫらしからぬ卑猥な生徒がいるということだ」
工藤監督の言葉に疾風は意味が分からなかった。
卑猥な生徒って、それは苦情を言う側がどうかしているのではないか、と思ったのだ。
「困ったことにこの苦情は何百件も届いている。
そして、学園側もこの苦情を問題視している」
工藤監督が疾風をじっと見つめた。
周囲にいた男女の陸上部員も疾風をじっと見ている。
「……俺？」
疾風は訳が分からなかった。
卑猥な生徒だなんて、今日まで言われたことがなかったし、疾風にはそんな苦情を受けるような破廉恥な行動を取ったこともなかった。
だから、卑猥な生徒と注目を集める理由が分からなかったのだ。
「皆が分かっている通り」

　工藤監督が疾風を指差した。
「井上疾風が、問題の卑猥な生徒だ。
　その股間のもっこりが、多くの苦情を集め、この陸上部の品位を損なっている」
　工藤監督の言葉に疾風は思わず己のもっこりを手で覆った。
　卑猥だなどと指を差されて、恥ずかしくなったのだ。
「というわけで、これから疾風のチンポの検分を行う。
　全裸になれ、疾風」
「待ってください！」
　全裸になれ、と指示を出され、疾風は驚いた。
「俺は卑猥なことなんて、何にもしていません。
　疚しいこともありません。
　それなのに全裸になれと言われても困ります！」
　疾風にとっては当たり前の道理を口にすると、工藤監督が渋い顔をして首を振った。
「疾風、お前はまさか、その卑猥極まりないもっこりが何も問題がないと思っているのか？
　他の生徒を見てみろ。
　金玉の形だの亀頭の形だのがくっきりと出ているのは、疾風、お前だけだぞ」
「そうだぞ、疾風。
　チンポがくっきりしている卑猥なもっこりをしているのはお前だけだぞ」
「まさか、お前、そのもっこりで健全だと思ってたのかよ」
「私、ずっと井上くんのもっこりが同じ陸上部として恥ずかしかったの」
「そうよね、井上くんのもっこり、気持ち悪いわよね」
　周囲の陸上部員たちまでもが、疾風のもっこりを卑猥だと責め立てる。
「分かったら全裸になって検査を受けろ、疾風。
　それとも、陸上部に迷惑をかけないために退部するか？」
「そんな！」
　工藤監督の言葉に疾風はショックを受けた。
　疾風は陸上の特待生としてこの学園に入学した。
　そして、家計を助けるために陸上の特待生での大学進学を望んでいる。
　そんな疾風にとって、この陸上部を退部しろ、というのは受け入れがたい宣告なのだ。
「さあ、どうする？
　退部するか？　それとも検査を受けるか？」
　工藤監督の言葉は真剣そのもので、退部か全裸検査の二択以外の選択肢など存在しないかのようだ。
　疾風は泣きたくなった。
　陸上で華々しい成績を修めているとはいえ、羞恥心に関して言えば、疾風は普通のＤＫだ。
　とてもではないが、人前で全裸になれるような蛮勇など持ち合わせていない。
　それに、この学園は共学だ。
　当然、陸上部以外にも女子生徒が運動をしており、全裸になるということは女子生徒にチンポを見られるということだ。
　そんなこと、できる訳もない。

　だが、それと同じぐらい、疾風は陸上を続ける理由がある。
　実家の家計を少しでも助けるために、陸上の特待生になる必要があるのだ。
　羞恥心と実家への思いの間で疾風の心は揺れ動いている。
　大会当日とは比較にならないプレッシャーのせいで、疾風は泣き出しそうな顔をしている。
「どうした？
　全裸検査が嫌だというのならそう言え。
　そうしたらお前は退部だ」
　工藤監督が悩み苦しむ疾風に決断を迫る。
　退部するわけにはいかない……
　疾風は苦しみの末にそう結論付けた。
「分かりました。
　脱ぎます」
　疾風はランニングシャツの裾に手をかけてめくり上げた。
　引き締まった腹筋やぎゅっと締まった胸板が露わになる。
　続いて疾風はスパッツをゆっくりと脱いだ。
　スパッツに覆われていた雄肉で引き締められた尻やサポーターの下で窮屈そうにしている疾風のチンポが露わになる。
　スパッツに覆われているときから卑猥なもっこりであったが、薄手のサポーター一枚になるとそのもっこりの卑猥さは際立ち、サポーターの布地が引っ張られている様子がいやらしさを醸し出していた。
　疾風はサポーターに手をかけた。
　サポーターにかけた疾風の手が震えている。
　ほぼ全裸の疾風だが、疾風の羞恥心にとって薄手とはいえチンポというデリケートな部位を覆う布地の存在は心強かったのだ。
　そんな最後の守りを脱ぎ捨てることに疾風が躊躇をしても仕方がないことだろう。
「脱がないのか？
　当然だよな、お前のチンポは卑猥なんだからな。
　恥ずかしくて見せられないんだろう？」
　工藤監督が疾風を嘲笑した。
　疾風は男にとってデリケートな部位であるチンポを嘲笑されて顔を真っ赤にした。
　チンポを見せることが恥ずかしいのは本当のことだ。
　けれど、それは真っ当に育った人間として当然の羞恥心であって、己のチンポを卑猥なものだと思っているからではない。
「まあ、お前がチンポを検分されたくないのなら仕方がない。
　退部だ」
「退部！　退部！」
「退部！　退部！」
　工藤監督の言葉に部員たちが疾風を囃し立てる。
　疾風は羞恥心に震え、泣きそうになった。

昨日まで、この陸上部は普通の陸上部であった。
工藤監督も、陸上部の仲間たちも、こんな風に疾風を嘲笑し、囃し立てたりしなかった。
どうしてこんなことになったのか、疾風には分からない。
けれど、この陸上部で活動を続けるにはチンポ検分に耐えないといけないのだ。
疾風は歯を食いしばってサポーターを握り締めた。
そして、ゆっくりとサポーターを下ろした。
ぼろりん！
疾風のチンポが露わになった。
サポーターで押し込められていたときからその存在感は人並み外れていたが、露わになったチンポは巨根と呼ぶのにふさわしいものであった。
下腹部はＤＫであるにもかかわらず幼児のように毛の一本も生えていなかった。
陰茎は無毛の下腹部とは対照的に、常人よりも太く長く逞しいものであった。
陰茎の先にはずる剥けの亀頭がくっついているが、亀頭も堂々とした立派なものであり、そして百戦錬磨の雄のように黒々としていた。
金玉も常人より大きく、ぷりっとしており、陰茎の立派さと釣り合うものであった。
「なんだ、この卑猥なチンポは」
工藤監督が疾風を嘲笑した。
疾風は羞恥心から、両手でチンポを覆い隠した。
けれど、疾風のチンポは大きいので覆った手の隙間からチンポが覗いている。
「隠すな！」
「は……はい……」
工藤監督の叱責に、疾風はチンポを覆い隠していた手を離し、身体の側面に寄せた。
「やべえよ、このチンポ」
「汚いなあ、同じチンポとは思えないぞ」
「やだあ、こんなチンポと同じ陸上部だなんて」
「気持ち悪いよね」
陸上部員の男女が疾風のチンポを嘲笑する。
その悪意に満ちた言葉の一つ一つに疾風の心は傷つき、血の涙を流す。
「お前、この下腹部は何だ？
わざわざチン毛を剃っていやらしい身体にしているのか？」
工藤監督の言葉に疾風は泣きそうになった。
パイパンは疾風にとってコンプレックスであった。
そのコンプレックスを「いやらしい身体」などと言いがかりをつけられてＤＫでしかない疾風が平然としていられるわけがない。
「いいえ……剃っていません。
生まれつきです」
疾風は羞恥心に震えながら、己のパイパンを告白した。
「なるほど。
つまりお前は生まれついてのいやらしい身体の持ち主ってことか。
恥ずかしい奴だな」

　工藤監督が疾風を侮辱する。
　疾風がパイパンを恥ずかしく思っているのは事実だが、そのパイパンを他人に、それも敬愛する指導者である工藤監督に笑われて平気でいられるはずがない。
　疾風は顔を苦渋に歪めた。
「パイパンだなんて、みっともないよな」
「チン毛が生えていないなんて、軽蔑するわ」
「こんな人が同じ陸上部だなんて、本当に嫌だわ」
「恥ずかしいわよね、パイパンだなんて」
　陸上部員の男女の侮辱も、疾風の心に追い打ちをかける。
「それになんだ、この無様で不細工なチンポは。
　スポーツマンには慎ましいチンポが相応しいんだ。
　それを、こんなエロ男優のようなチンポをして。
　恥ずかしくないのか？」
　工藤監督の嘲笑は疾風のチンポの大きさにまで言及してきた。
「こんな無様で不細工なチンポをぶら下げて、部活動をしながらザーメンを垂れ流すことを考えていたんだろ？」
「そ、そんなことはありません！」
　疾風は工藤監督の邪推を否定した。
　疾風は健康的なＤＫだ。
　だから、性欲がまったくないとは言わない。
　けれど、部活動の間もザーメンを垂れ流すことを考えていた、と邪推をされるなんて不本意だし、ショックだ。
「いいか、他の部員を見てみろ。
　皆、慎ましいチンポをしているだろ？
　お前だけだぞ、無様で不細工で恥ずかしいチンポをしているのは」
「そうだぞ、疾風。
　お前、図々しいチンポをして恥ずかしくないのか？」
「同じ陸上部の仲間だとは思えないよな」
　工藤監督の侮辱に、陸上部員の男たちが腰を突き出してスパッツに覆われた慎ましやかなもっこりを強調する。
「こんなチンポをしている時点で言い逃れのしようがないほどのセクハラチンポだが、お前の欠点はこんなものじゃないぞ」
　工藤監督の言いがかりはまだ終わらない。
「なんだ、このずる剥けチンポは。
　スポーツマンは謙虚さも備えていないといけないんだ。
　それを、亀頭を恥ずかしげもなく見せびらかすようないやらしいチンポをしやがって。
　恥を知れ」
　工藤監督の侮辱は疾風のずる剥け亀頭にまで及んだ。
　チンポの形まで嘲笑されて、疾風の目から涙が溢れだした。
「そうだぞ、お前の亀頭は図々しいぞ」

「スポーツマンがずる剥けチンポをしていいはずがないだろ」
「エロ男優じゃあるまいし、みっともないわよね」
「正直言って、見てるだけで気持ち悪いわ」
　陸上部員の男女が疾風の亀頭を侮辱する。
　ＤＫでしかない疾風にとって、チンポの形はデリケートな問題だ。
　それをねちねちと責められて、疾風は震えることしかできない。
「手術したのか？　エロ男優になるために手術したんだろ？
　でなけりゃ、こんな不細工で惨めなチンポになるはずがないもんな」
　工藤監督が疾風のチンポを指差して嘲笑する。
「いいえ……これは自然に剥けたんです」
　疾風は涙を流しながら弁明した。
　ＤＫといえば、まだまだ性への羞恥心が強い年頃だ。
　それなのに、性の象徴であるチンポをねちねちと侮辱されて平然としていられるはずがない。
　疾風は今すぐこの場所から消え去りたかった。
　服を着てこのグラウンドから走り去りたかった。
　けれど、そんな疾風の脳裏に浮かぶのは疾風の活躍を期待している家族の顔だ。
　家族を失望させないためにも、疾風は陸上部に所属し続けるしかないのだ。
　だから、疾風はこの屈辱的なチンポ検分に耐えなくてはならないのだ。
　それに、パイパン、チンポの大きさ、ずる剥け亀頭と、疾風のチンポについての嘲笑のネタはもうないだろうと疾風は思った。
　だから、これで終わりだろうと疾風は涙を流しながら期待をした。
「最後の最後に、なんだ、この亀頭の汚さは。
　こんなに使い込んだ汚い亀頭は見たことがない。
　お前はチンポを使うことしか能のないエロ猿か？
　学校帰りにセックス三昧か、汚らわしい。
　でなけりゃ、この亀頭の汚さをどう弁明するんだ？」
　だが、工藤監督による疾風のチンポへの侮辱はまだ続いた。
　疾風の黒々とした亀頭にまでその侮辱が及んだのだ。
「ＤＫなのに、セックスでもしたのかよ？」
「セックスしちゃうＤＫとか、不潔で汚いよな」
「軽蔑するわ」
　陸上部の男女が疾風の亀頭の黒さを嘲笑する。
「セックスなんてしていません！」
　疾風は泣きながら反論した。
「俺は童貞です！
　セックスなんてしたことがありません！
　本当です！」
「じゃあ、なんで亀頭がこんなに汚い色をしているんだ、ええ？」
　工藤監督が疾風の亀頭の色について追及してきた。

疾風は言葉に詰まった。
疾風は一日に三回以上オナニーをしている。
常人より大きな金玉によってもたらされる性欲が強く、朝晩のオナニーでは足りずに休み時間にトイレに籠もってデカチンをシコシコしているのだ。
疾風自身、学校でオナニーをすることには後ろめたさを感じてはいるのだが、旺盛な精力でチンポがムラムラし、我慢していると頭の中がオナニー一色になってしまうのだ。
頻繁なオナニーの結果、亀頭はオナニーのし過ぎで黒々としてしまったのだが、そんなことを言えるはずがない。
疾風はチンポこそ大きいが、羞恥心は人並みのＤＫなのだ。
自身のオナニー事情を開けっぴろげに、それも女子生徒の前で話せるはずがない。
「理由を話せないということは、やはりセックス三昧か。
いやらしい奴だな」
「違います！」
工藤監督の当てこすりに疾風は首を振った。
「セックスをしていないというのなら、オナニーのし過ぎか？」
工藤監督に図星を刺され、疾風は顔を真っ赤にした。
一日三回以上オナニーをしているなんて、告白できるはずもない。
疾風は羞恥心は人並みのＤＫなのだから。
「その様子だと図星か。
朝晩と休み時間のたびにオナニーをしているとして、一日七回か。
汚らしいオナ猿だな」
「そんなにしていません！」
工藤監督の邪推に疾風は大声で否定をした。
空いた時間でオナニーを繰り返すようなオナ猿と罵倒されて、平静ではいられなかったのだ。
「なんだ、もっとたくさんか？
授業中にもシコシコしているのか？
お前、スポーツマンじゃなくて、オナニーマンだな」
工藤監督の中傷に、陸上部の男子生徒や女子生徒が笑い出した。
「そういえば、授業中にザーメンの臭いを感じたことがあるんだけど、疾風のザーメンだったんだな」
「妙にスケベな顔をして授業を受けているから何事かと思ったら、机の下でシコシコしていたのかよ、変態だな」
「そんなにオナニーが好きなら猿になればいいのに」
「だよねー、オナ猿と授業を受けているとか気持ち悪いわー」
工藤監督の中傷に追従して、陸上部員たちも疾風を中傷する。
あまりにも酷い中傷に疾風の頭は真っ白になった。
「そんなにしてない！
一日三回ぐらいです！」
自身のオナニーの回数を口にしてから、疾風は頭が己の発言を自覚した。

　中傷に気を取られるあまり、己のオナニー事情を正直に話してしまったのだ。
「へええ、一日三回か。
　つまり、学校でもオナニーをしているんだな」
　工藤監督の追求に疾風は己の口を慌てて抑えた。
　けれど、飛び出した言葉は取り消すことができない。
「学校でオナニーをするとか、変態じゃん」
「マジでオナ猿だったんだな、こいつ」
「だから亀頭が真っ黒なのね」
「オナ猿と同じ部活だとか汚らわしいわ」
　陸上部員たちが疾風のオナニー事情を揶揄する。
　疾風は顔を真っ赤にし、握り拳を震わせ、羞恥に全身を震わせるが、発した言葉を取り消すことはできないのでどうすることもできない。
「つまり、だ。
　お前はどうしようもない卑猥人間だってことだな」
　工藤監督が疾風に侮蔑の眼差しを向けた。
「パイパンだけでも卑猥だって言うのに、まさかの天然淫乱パイパン。
　これだけでも罪深いな。
　その上、チンポはエロ男優並のでかさでスパッツをもっこりさせる卑猥チンポ。
　謙虚さが求められる亀頭は図々しいずる剥けで、その上、オナ猿由来の真っ黒と来た。
　こんなにも卑猥な要素を備えたクソチンポは見たことがないぞ」
　工藤監督による疾風のチンポへの侮辱に、疾風は何も言い返せない。
　疾風が天然パイパンなのも、チンポが大きいのも、亀頭がずる剥けで真っ黒なのも事実であったからだ。
　だが、工藤監督の中傷はあまりにも酷なものであった。
　ＤＫでしかない疾風にとって、チンポの問題はあまりにもセンシティブであった。
　そのセンシティブな部分を土足で踏みにじられるような侮辱に疾風は耐えることしかできない。
　疾風は屈辱と恥辱に震えながら、悪夢のような時間が終わることを願うだけだ。
　だが、そんな疾風を追い詰めるような変化が疾風の股間で始まっていた。
　疾風のデカチンが充血し、膨張し、勃起し始めたのだ。
　平常時でさえ太々しい疾風のデカチンがますます太く大きくなり、大空を凌辱するかのようにギンギンになる。
「おいおい、お前は卑猥なだけじゃなくて変態なのか？」
　工藤監督が疾風の勃起チンポを見下ろした。
「卑猥なチンポだと責められて勃起するなんて、変態じゃなかったら何なんだろうなあ？」
「見られて勃起するとかありえないわ」
「変態じゃん、こいつ」
「気持ち悪いよね、誰も勃起させろなんて言っていないのに」
「マジでキモい変態じゃん」
　陸上部員たちが、疾風が勃起したことを嘲笑う。

疾風は恥辱と屈辱に涙を流しながら全身を震わせた。
疾風にとってあまりにも酷な嘲笑であった。
疾風は精力旺盛な健全な肉体を持つＤＫだ。
その若々しい肉体が恥辱に耐えかねて誤作動を起こしても仕方がないことなのだ。
それを変態の一言で切って捨てられては、疾風の立つ瀬などないことになる。
「四重苦の卑猥チンポの上に、見られて悦ぶ変態チンポだとはな。
疾風、お前はスポーツマンじゃないな。
変態オナニーマンだ。
この陸上部の、いや、この学園の品位を損なう下劣な雄猿だな」
「うううううう……」
工藤監督の容赦のない侮辱に疾風は呻くことしかできない。
「監督、こんな変態と同じ部活だなんて、俺、耐えられません！」
「俺もこんな気持ち悪いチンポと同じ部活だなんて嫌です！」
「こんなセクハラチンポ、さっさと退部させましょう！」
「そうよそうよ！」
陸上部員たちも工藤監督の侮辱に追従する。
「そうだな、部員たちの苦情ももっともだ。
俺も、お前のような気持ち悪いオナ猿の指導を続けることは正直に言って、不愉快だ」
「そんな！」
疾風は工藤監督の無慈悲な言葉に絶望した。
疾風の脳裏に浮かぶのは、疾風の活躍と陸上での特待生で大学進学を期待する実家の家族の顔だ。
チンポのせいで退部させられたなんて、実家の家族にどう説明すればいいのだろうか……
「お願いします！
退部にはしないでください！
なんでもします！
なんだって耐えてみせます！
だから、退部にだけはしないでください！」
疾風は工藤監督に土下座をした。
ギンギンに勃起したチンポが疾風の腹を圧迫する。
哀れな姿であった。
ＤＫが全裸でチンポを勃起させながら土下座をしているのだ。
人の心があるのならば、少しは心を動かされそうなものだ。
そういう意味では、工藤監督も人の心を備えていた。
「……本当に何でもするのか？」
「はい！」
工藤監督の問いかけに、疾風は断言した。
このまま退部になんてなるわけにはいかない。
それならば、どんな屈辱にでも耐え抜いて退部を回避するしかないのだ。

「監督！　甘すぎます！」
「さっさと退部させてください！」
　陸上部員たちが工藤監督に抗議をする。
「こんな卑猥なチンポを備えているこの陸上部の恥部とはいえ、一応、これまでともに練習をしてきた仲間だ。
　チャンスを与えるべきだと俺は思う。
　それがスポーツマンシップじゃないか」
　工藤監督の言葉に陸上部員たちが黙り込んだ。
「ありがとうございます！」
　工藤監督の言葉に疾風は礼を述べた。
　チャンスさえ与えられるのならば、何だってしてみせる。
　何にだって耐えてみせる。
　疾風は悲壮な覚悟で決意を固めた。

奥付

『セクハラッシュ巨〇陸上DK』より第一話

初出：2023年3月30日
著者：金目

金目の同人活動一覧
【pixiv】
https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005

【DLsiteがるまに】
https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】
https://twitter.com/chigaya_deep